

「アンラツキーナ夜」

赤松新

☆登場人物

神田恭一（42）・・・若月家に入った強盗

若月誠司（47）・・・若月家の主人。若月コーポレーションの

社長

若月麻衣子（45）・・・誠司の妻

若月直人（14）・・・若月家の長男。引きこもり

若月満（10）・・・若月家の次男。誘拐されている

若月久美（17）・・・若月家の長女。妊娠している

橋口幸雄（34）・・・誘拐犯

富田正利（32）・・・橋口の仲間

中谷裕二（31）・・・橋口の仲間

澤田広（15）・・・直人の先輩。直人をカツアゲしている。

岩瀬学（15）・・・澤田の仲間

三宅和樹（19）・・・久美の彼氏。

○若月の家・外観（夜）

一際大きな家。辺りには人気が無く静まり返っている。

神田恭一（42）、黒い服に身を包み、革の手袋をしている。

辺りを見回し若月の家に入る。

○同・リビング・中（夜）

広いリビング。高級な家具にソファ。

若月誠司（47）、ウイスキーをあおり、落ち着かない様子。

テレビにはニュース番組が映っている。

アナウンサー「それでは9時のニュースです」

神田、ドアを開けて入ってくる。

若月、振り返り。

若月「おい、遅いぞ」

若月、拳銃を持つてる神田を見て驚く。

神田「遅い？待ち合わせした覚えはないけど」

若月「……！」

若月、大きく息を吸い込む。

神田「おっと！声を出すなよ」

一気に緊張感が高まる。

神田、眼光鋭く、素早く室内を見渡す。
拘束バンドを出しながら、

神田「この状況でお前が出来ることはたった一つ。ただ大人しくする。どうだ？簡単な事だろうか？」

若月「…」

神田、拘束バンドで若月の手足を縛り上げる。

神田「お前は若月コーポレーションの社長で
お金持ち、そこに俺がやってきた。まあ分かるよな？」

若月「何だ…か、金か？」

神田「金か。いいねえ。金も貰おうかな」

若月「金ならない…」

神田、大袈裟に手を振りながら。

神田「おいおいおい！そんな見え透いた嘘つくなよ！こんな大きな家に住んで、高級そんな家具が並んでる。それなのに金がないなんて」

若月「本当なんだ！」

神田「あれ？もしかしてお前、この銃がただの脅しで本物じゃないと思ってる？」

神田、懐から拳銃を取り出し、サイレンサーを付け、壁に向けて二発撃つ。

壁に二つの穴が開く。

神田、若月を見てニコツと笑う。

若月「（怖がりながら）か、金はない！」

神田「やれやれ、俺は優雅に仕事をするのが信条なんだが仕方がない。足の一本でも撃てば出してくれるか」

神田、にじり寄り若月の足に狙いを定める。
る。

若月「止めてくれ！ほ、本当に無いんだ！」

若月、後ずさる。足元の紙袋を倒し、中から札束が出てくる。

神田「（ニヤツと笑って）あれ？なんだこれ？」

神田、札束を拾い上げる。

若月「その金はダメだ！渡せないんだ！」

神田「そんな事言われて、『はい、そうですか』ってなるわけないだろう」

若月「む、息子の命がかかってる！頼む、持っついていかないでくれ！」

神田「（鼻で笑い）嘘をつくならもっと気の利いたやつにしてくれよ」

固定電話が鳴る。

若月、必死に電話を取ろうとする。

神田、若月の足を払い倒す。

神田「なに勝手に出ようとしてるんだ」

若月「お、お願いだ！だ、出させてくれ！」

神田「ダメだ」

若月「息子の命に関わる事なんだ！」

神田「はあ？」

若月、神田の身体にしがみつき、懇願する。

若月「頼む！お願いします！」

神田「離れるよ」

若月「お願いしますから！」

神田、若月を払いのけ。

神田「ああもう分かったよ！ただし、スピーカーにして話せ。少しでも余計な事を言ったら分かってるな」

神田、若月に銃口を向ける。

若月、震える手で電話機のスピーカーのボタンを押す。

若月「…も、もしもし？」

橋口幸雄（34）、ボイスチェンジャー

で変えられた声で応答する。

橋口の声「もしもし？若月さん？」

若月「…私だ」

神田、怪訝な表情。

橋口の声「どうですか？1億円は用意できましたかあ？」

若月「い、今…用意している」

○ 廃工場・外観（夜）

二階建ての小さな廃工場。錆びたシャッターに立ち入り禁止の張り紙。

○ 廃工場・中（夜）

ランプの明かりだけが点いている。

橋口、携帯電話で電話をしている。

若月満（10）、目隠しをされイスに縛られている。

富田正利（32）、ナイフの手入れをしている。

中谷裕二（31）、牛丼を食べている。辺りにも食い散らかした跡。

橋口「使い古したお札で連番じゃないもの。

GPSとかカラーボールなんて下手な小細工も止めてくださいよ」

若月の声「…分かっている」

橋口「あ、それと警察にはくれぐれも内緒で。お子さんの命が大切ならね」

若月の声「それも分かっている！満は…？満は無事なんだろうな？」

橋口「もちろん無事ですすよ。でも若月さんが約束を破っちゃったらどうかなく？」

橋口、満の頭を撫でる。

若月の声「せ、せめて声を聞かせてくれ！」

橋口「またあとで連絡します」

橋口、電話を切る。

○若月の家・リビング・中（夜）

若月、電話に怒鳴っている。

若月「おい！待ってくれ！」

「ツーツー」と電話が切れた音。

若月「くそっ！！」

驚いている神田。

神田「…え？なに？これ…どういうこと？」

タイトル「アンラッキーな夜」

無言の二人。時計の音がやけに響く。

神田「…まさか…子供が誘拐されてるのか？」

若月、力なく頷く。

若月「次男が…学校の帰り道で…夕方に連絡があって」

神田「（驚きながら）あ、そう…そうなんだ」

若月「すぐに用意出来る金だけじゃ足りなくて、金目の物を担保にして：」

周りのオブジェや絵画、所々無くなっている。

若月「だから：この金だけはダメなんだ！」

若月、テーブルを強く叩く。

神田、少し怯む。

若月「明日金を渡さないと満が：満が：」

若月、うな垂れる。

神田「いや、でも：そう言われてもな」

若月麻衣子（45）、入ってくる。

大きめのバックを持っている。

麻衣子「あなた、何とか借りて：」

神田を見て驚き、立ち止まる麻衣子。

神田、素早く懐から拳銃を取り出し。

神田「大声を出すなよ」

神田、若月に銃口を向ける。

麻衣子「お、夫を：どうするつもりですか！」

神田「どうされたいかはお前から次第だ」

若月「大丈夫だから：こっちへ」

麻衣子、恐る恐る若月の隣へ行く。

麻衣子「（怖がりながら）な、なんの用ですか」

神田、拘束バンドで麻衣子の手足を縛りながら。

神田「見たら分かるだろ？強盗だよ」

麻衣子「強盗…！」

神田「ああ」

麻衣子「よりにもよって今夜だなんて…！どうせならもっと早い日に来てくれれば…」

神田「…」

若月「おい、お前どうだった？」

麻衣子「あ…なんとか全部売れたわ」

若月「よかった…」

麻衣子「これで併せて1億円…」

麻衣子、バックを紙袋の隣に寄せる。

麻衣子「あなた、これで…これで満は…」

若月「ああ！絶対に満は大丈夫だ！」

麻衣子、若月にしがみつき泣く。

若月「（言い聞かせる様に）大丈夫！大丈夫

夫！」

神田、所在ない感じで。

神田「…（軽い咳払い）」

若月「（神田に気がつき）あ、強盗さん。まだ居たんですか？」

神田「な、なんだよその言い方」

若月「うちはこのような状況ですので、今日のところはお引取りいただけますか？」

神田「いやいや…こっちだって強盗に入ったからにはだな…」

若月「でもこのお金はお渡し出来ません。もし強引に持って行ったら、強盗さんが間接的に満を殺したことになるんですから」

神田「ええ…？そ、そうか？」

麻衣子「なんかすみません…何のお構いもしませんで」

神田「だから帰らそうとするな」

若月「でも家にはもう何もありませんから…」

神田、棚にある木彫りの置物を見る。

目に青い石のような物がある。

神田「…分かった、金はいい。それより今度
発表する新製品の機密情報があるな」

若月「ど、どうしてそれを！？」

神田「それを渡してもらおうか」

若月「どこのの！？どこの会社に頼まれた！？

赤城開発か！？」

神田「…」

若月「そうだろ！？赤城なんだな！？」

神田「そういう事を親切に教えてたら、俺は

この世界で飯が食えなくなるんだよ」

若月「くそ！」

神田「さあ、早く渡して貰おうか」

若月「…でも…それも…ありません」

神田「おいおい、嘘つくんじゃねえよ。お前
の会社で、いくら探しても出てこなかった
んだ。考えられるとしたらただ一つ」

若月、目を逸らす。

神田「お前が持っている…だろ？」

若月「ほ、本当です！今、手元にないんで
す！」

神田「(ため息をついて)結局痛い目に遭わないと分からないみたいだな」

神田、銃口を若月に向ける。

麻衣子「きゃあ！」

神田「どうする？奥さんを撃ってもいいんだぜ」

若月「止めてください！本当にはないんです！」

神田「じゃあどこにあるんだ？」

若月「…満の…満のランドセルに隠してあります…」

神田「はあ？満って今、誘拐されてる奴か？」

若月「…はい」

○(イメージ) 登下校の道

満、友達と歩いている。

ランドセルにくくり付けられている、

小さくて赤い入れ物が揺れている。

○若月の家・リビング・中(夜)

困惑する神田。

神田「なんでだよ。なんでそんなに大事なものを息子に持たせるんだよ」

若月「うちの新製品の機密情報が狙われているのは知っていました」

神田「だから？」

若月「まさかそんな大切な情報、息子が持っているなんて考えない：だからです」

神田「お前、それ親としてどうかと思うぞ」

若月「すみません：」

神田「ちっ！面倒くせえな：」

固定電話が鳴る。

若月、麻衣子と顔を見合わせる。

神田「おい：下手なこと言うなよ」

若月「は、はい」

神田、電話機のスピーカーのボタンを押し、若月に話すように促す。

若月「：も、もしもし」

ボイスチェンジャーで変えられた声の橋口。

橋口の声「もしもし？若月さん？」

○廃工場・中（夜）

橋口、目出し帽を被り携帯電話で話している。

橋口「明日の金の受け渡し方法なんですが」

若月の声「満は！？満は無事なんだろうな！」

橋口「はいはい無事ですよ。今そちらに満君の映像をお送りしますので」

富田、パソコンを操作している。

× × ×

若月の携帯電話に着信音が鳴る。

神田、開いて若月達に見せる。

満が縛られ、目隠しをされてイスに縛られている映像。

満、「お母さん！お父さん！！」と叫んでいる。

若月「満！！満！！」

麻衣子、泣き崩れる。

橋口、画面に映りこんで。

橋口の声「どうですか？これで信用していただけました？」

× × ×

橋口、パソコンの画面に向かって話している。

橋口「我々も無駄な殺しはしたくないのでね。変に騒がないでもらえると助かります」

若月の声「…分かっている」

橋口「では明日の受け渡し方法なのですが、長男の直人君にお願いできますか？」

若月の声「な、直人に？」

橋口「はい。直人君一人で、お金を持って来てください」

若月の声「いや！しかし…！」

橋口「警察はもちろん、直人君以外の人がある場合、満君の命は…分かりますよね？」

若月の声「…ちよ、ちよつと待ってくれ！」

橋口「場所と時間は、また連絡します」

橋口、電話を切る。

○若月の家・リビング・中（夜）

電話から「ツーツー」という音が鳴り

響いており、スイッチを押す若月。

若月「ああ…」

麻衣子「どうしたらいいのよー！！」

狼狽する若月と麻衣子。

若月「直人になんて無理だ」

麻衣子「満はもう…あああ！満にもう会えな

いのね…あなた」

麻衣子、若月に泣きつく。

若月「なんとか方法を考えよう。直人以外の」

神田「おい、何言ってるんだよ。その直人に任

せたらいいだろ」

若月・麻衣子「…」

神田「直人は何処だ？」

若月「…家にいます」

神田「だったら早く呼んで来いよ」

若月「…引きこもりなんです。直人」

神田「引きこもり？」

若月「はい…お恥ずかしい話なんです…」

神田「（麻衣子に）なんでもいいから呼んで

来いよ」

麻衣子「無理です…」

神田「なんでだよ？」

麻衣子「あの子、少しでも気に食わないことがあると、すぐ暴れて…もう手にはおえないんです…」

神田「そんなこと知るかよ。明日そいつが行かないとダメなんだろう」

麻衣子「部屋から出たくないって…時々財布からお金がなくなってるし…何をやっていくのか…」

若月「全く…お前が甘やかすから…！」

麻衣子「な、なんで私のせいなのよ！？あなたも直人に何も言わないじゃない！」

若月「家の事は任せてあるだろう。私は外で働いてるんだ」

麻衣子「仕事仕事って…大体、本当に仕事なのかしら…」

若月「（焦って）そ、それはどういうことだ」

麻衣子「自分が一番分かってるでしょ？」

神田「おい！いい加減にしろよ！」

若月「なんで私が浮気を疑われないといけな
いんだ！？ねえ強盗さん」

麻衣子「あら？私は一言も浮気なんて言っ
てませんよ。自分に心当たりがあるからそう」

神田「静かにしろ！」

若月・麻衣子「すみません」

神田「とにかく首根っこ掴んで連れて来い！」

若月「わ、分かりました」

若月、手足が縛られてるため、もそも
ぞ動いている。

神田、うんざりした表情で。

神田「あくもう！部屋はどこだ？」

○同・直人の部屋・中（夜）

神田、ドアを蹴り開け、中に入る。若
月直人（14）、上下スエットで、髪
は伸び放題。驚いている。

部屋は漫画やゲームが散乱している。

神田「お前が直人か？」

直人、驚いてぼかんとしている。

神田「直人かって聞いてるんだよ」

直人、何回も頷く。

神田「よし、ちよつと来てもらおうか」

直人「…い、嫌だ」

神田「いいから来いよ」

神田、直人を引っ張り上げる。

直人、引っ張られて行く。

○同・リビング・中（夜）

神田、直人を引っ張って来る。

若月「直人…！」

若月、麻衣子、リビングに座っている。

神田、直人を若月の側に投げ飛ばし。

神田「（直人に）そこで大人しくしてろ」

直人「な、なにこれ…この人誰！？」

神田、拘束バンドで直人の手足を縛り

ながら。

神田「俺はこの家に入った強盗だよ」

直人「ご、強盗…！」

怯える直人。

麻衣子「大丈夫よ、直人」

神田「こいつに今の状況を説明してやれ」

直人、若月を見る。

若月「…直人、驚かずに聞いてくれ…実は、

満が誘拐された」

直人「え…！み、満が！？」

若月「ああ…もし、お金を渡さなかったり、

警察を呼んだら…満は…」

直人「そ、そんな…」

神田「それでだ、その金の受け渡しを、お前にやってもらいたい」

直人「（驚いて）ええ！僕に！！」

若月「犯人から、お前一人で来るように指示されてる」

直人「そ、そんなの…無理だよ！」

神田「無理でもやるんだよ」

直人「で、でも…僕…外に出たくない…」

神田「じゃあ弟は死んでもいいんだな」

直人「そ、それも嫌だ！！」

神田「だからお前持って行けよ！」

直人「それも：出来ない：！」

神田「だったら、弟は死ぬ！それだけだ！」

直人、泣きながら暴れる。

直人「い、嫌だ！外に出たくない！出たく

ないよ！」

神田「（押さえつけて）暴れるんじゃないやねえ

よ！」

直人「あ：あいつらが：僕、無理だ：」

神田「あいつら？あいつらって何だ？」

直人、ただ泣くだけ。

神田、直人を叩いて。

神田「おい、あいつらって誰だ？おい！」

直人、首を振る。

神田、直人を叩く。

神田「さっさと見え！」

直人「：」

神田「ちっ！素直に話さないなら仕方ねえか」

神田、拳銃を取り出し見せる。

直人、かなり怖がり。

麻衣子「や、止めてください！！」

神田「どうすんだ？言うのか？」

直人、何度も頷く。

神田「よし。何があったんだ？」

直人「…僕…：学校の先輩からお金を取られてて…」

神田「カツアゲか？」

直人、頷く。

直人「…どんどん額も大きくなって…毎日毎

日…」

若月「…」

直人「…が、学校休んでも家に来るし…」

麻衣子「…そんな」

直人「夜中にも呼び出されるし…誰にも言えなくて（泣き始める）」

麻衣子「も…もう止めてください！」

若月「な、直人が可哀想です！」

神田「可哀想？よくそんな事言えるな。こうなったのもお前らが悪いんだろうが」

若月「で、でも…」

神田「でもじゃねえよ。お前らガキのこと何

も見えてねえだろ」

麻衣子「…」

神田「いいいか？親という漢字は、木に立って見ると書いて親なんだ」

若月「…」

神田「高いところから子供が何処で何をしてるのが見守るのが親なんだよ」

若月、麻衣子、俯く。

神田「お前らは木に立つどころか、子供を見る事さえしてねえんだよ！」

麻衣子「（泣きながら）直人…ごめんね…」

若月、苦い表情。

神田「ちっ！何なんだよ！？」

玄関のドアが開けられる音がする。

若月久美（17）、帰って来る。

久美の声「ただいま」

神田、拳銃を懐から出す。

神田「誰だ？」

若月「娘の…久美です」

○同・玄関・中（夜）

久美、靴を脱いでいる。

若月の革靴を見る。

久美「…（ため息）」

○同・リビング・中（夜）

久美、リビングに入ってくる。

久美「ただい！」

神田、若月達に銃口を向けている。

神田「頼むから大声だけは出さなくてくれよ」

久美「きゃ、きゃあく！」

久美、その場にへたり込む。

神田「だから大声出すなって」

神田、久美に近寄る。

久美「きゃあ！きゃあく！」

久美、悲鳴をあげ騒ぐ。

麻衣子「ら、乱暴は止めてください！」

神田「女の悲鳴ほど耳障りなものねえから

な。黙らせるだけだよ」

神田、久美の髪の毛に手を伸ばす。

久美「別に産む気ないし」

若月「当たり前前だろ！」

久美「ていうか、どっちにしてもあんたに関係ないでしょ」

若月「関係ないってなんだ？ええ？！俺は父親だぞ！」

久美、そっぽを向き無視する。

若月「おい！聞いてんのか！」

久美、なおも無視する。

若月「全く…家族の為に身を粉にして働いてるっていうのに…何なんだ！」

久美「へー、若い女と旅行とかに行くのも仕事なんだ。いいなあ、楽しそう〜」

若月「（焦って）な、何を言ってるんだ…お、俺はお前らのために…」

久美「女のところに入り浸って、家に帰ってこないのが私達のため〜？」

若月「い、いや…そんな事は…」

久美「さっきから家族家族って。気づいてないの？もうバラバラだよ」

若月「…！」

久美「父親が若い女に入れ込んで、長男が引きこもり、母親がアル中のホスト狂い」

若月「ええ！」

麻衣子「（焦って）く、久美！？」

久美「この家でまともなのは、私と満くらい？あ、もう私もまともじゃないか」

久美、高らかに笑う。

沈黙が流れる。

神田「おい、なんなんだよこの家」

若月「…強盗さん」

神田「むちゃくちゃだろ。父親が浮気三昧、長男が引きこもり、長女は妊娠、嫁はホストに狂い、で、俺に強盗に入れ、極めつけは、次男が誘拐」

久美「…え？」

神田「お前呪われてんのか？最近、神社とか燃やした？」

若月「い、いえ…しかし、このところ本当についてなくて…」

神田「運が悪過ぎるだろ」

若月「先週はうちの父が入院：5日前には

（麻衣子を顎で指し）こいつの実家が火事
になり：そして一昨日には：ついに：」

神田「：っ、ついに？」

若月「うちで飼ってた金魚が死にました：」

若月、悔しそう。

神田「（拍子抜けの感じ）え？：あ、そう」

若月「きんちゃん：きんちゃん：！」

久美「ちよ、ちよっと待ってよ：次男が誘拐
ってどういうこと？」

神田「だからそのまんまだよ。誘拐されたの。

次男が。OK？」

久美「（驚いて）そ、そうなのお母さん！？」

麻衣子「ええ：実は：」

神田、直人を掴んで。

神田「おい。行くぞ」

直人「え？ど：どこに？」

神田「お前には外に出れるようになってもら
わないと困るんだよ」

○近所の公園（夜）

小さい公園で、砂場と滑り台が外灯に照らされている。澤田広（15）、岩瀬学（15）、公園に来る。

派手なジャージを着て悪そうな格好。

澤田「なんだよ。若月いねえじゃねえか」

岩瀬「ふざけやがって」

神田、澤田達に近づいて。

神田「おお、お前らか。あいつにカツアゲしてるのって」

澤田「ああ？なんだオッサン？」

岩瀬「いきなり何言ってるんだ」

神田「バカそうな顔してんなく。カツアゲなんてダサイ真似してるからそうなんだよ」

澤田「なんだとこの野郎！」

岩瀬「舐めてんのか！」

澤田、ポケットからナイフを出す。

澤田「オッサン、吐いた唾、飲まんとかよ
く！」

澤田達、神田に突っかかっていく。

× × ×

澤田、岩瀬、地面に正座している。

鼻や口からは血が出ている。

澤田「（小さい声で）す、すみませんでした
…」

岩瀬、泣いている。

神田「どうしようかな？もう一生カツアゲ出
来ないように足の1本でも撃っておくか」

神田、懐から拳銃を出す。

澤田・岩瀬「ひいいい！！」

神田「冗談だよ、バカ」

神田、拳銃を懐にしまう。

神田「なんだよさっきの『吐いた唾、飲まん
とけよ』って。ガキのくせによくそんな言
い回し知ってるな」

澤田「（怖がりながら）あ、兄貴が…ビーバ
ップとか好きだから…」

神田、澤田の頭を叩いて。

神田「タメ口きいてんじゃねえよ」

澤田「す、すみません！」

神田「おい、直人」

直人、滑り台から恐る恐る出てくる。

神田「こいつらに言えよ」

直人「…（怖がっている）」

神田、直人を叩いて。

神田「早く言えよ。さつき練習しただろ」

直人「は、はい…（澤田達を見て）あの…」

神田「ほら！早くしろよ」

直人「（小さい声で）あ…あの！も、もう…

お金を払いたく…ないです」

澤田「…」

神田、直人を叩く。

直人「（大声で）お、お金はもう払わない！

ぼ…僕を蹴ったり殴ったりするのを止めて

ださ…止めろ！！わ、分かったか！」

神田「はいOK！（澤田達に）ちゃんと言っ

たからな。もうこいつに絡むなよ」

澤田「…」

神田、澤田を叩いて。

神田「分かったのかよ？」

澤田「は、はい」

岩瀬「で、でも…」

神田「あ？何がでもだよ？」

岩瀬「（怖がっている）…」

神田、岩瀬を叩いて。

神田「何がでもだって聞いてんだろぅが」

岩瀬「（一気に言う）ぼ、僕らも！先輩から、

持って来いって命令されてるんです！」

神田「はあ？お前らもカツアゲされてんの？」

澤田「…はい」

神田「（ため息ついて）あんな、自分がされて嫌なことを他の人にするんじゃないよ。

他の人も嫌に決まってるだろ」

澤田「すみません…」

神田「人が嫌がることはやらない。これは世の中生きていく上で大切な事だぞ」

直人「…」

直人、怪訝な表情で神田を見る。

神田、その視線に気がつき。

神田「何だよその目は？」

直人「…あ…いえ」

澤田「…その先輩、急に金を集めだして…他の奴らも必死になってて…」

神田「他の奴ら？」

澤田「はい…だから…（直人に）他の奴にやられるからな！」

直人「そ…そんな…」

神田、澤田を叩いて。

神田「そいつは何処にいるんだ？ここから遠いのか？」

○三宅の家・外観（夜）

赤い屋根の一軒家。

離れの部屋があり、電気が点いている。

裏手にいくつか工場などがあるが、使

われてない様子。

澤田、離れを指差している。

澤田「あそこです…」

神田「家にいるみてえだな。全く、カツアゲするくらいなら深夜も働けてんだよ」

○同・離れの部屋・中（夜）

ベッドやテレビがあり、壁には写真などがたくさん貼ってある。

三宅和樹（19）、金髪で部屋着のジヤージを着ている。ノックの音がする。

三宅「誰だ？」

澤田の声「…あ、あの澤田…です…お金を…」

三宅「おお。今開けるから待ってる」

三宅、鍵を回し、ドアを開ける。

神田が立っており、三宅、一瞬呆気に取られる。

三宅「だ、誰だよ…」

神田、三宅を殴る。

× × ×

三宅、正座している。

鼻や口から血を流している。

神田、ベッドに座っている。

直人、澤田、岩瀬、隅に立っている。

神田「二度とカツアゲなんてするんじゃないわねえ」

三宅「…」

神田、三宅の頭を叩き。

神田「聞いてんのか？お前のせいで、こっちは迷惑してんだよ」

三宅「…すみません」

神田「（澤田と岩瀬に）これでお前らも、直人に絡むんじやねえぞ」

澤田・岩瀬「はい…」

神田「金が欲しかったら、俺みたいに汗水たらして必死に働け」

直人「…（非難的な目で神田を見る）」

神田「金はどこにあんだよ？」

三宅、ベッドの下から小さな缶を出し。

三宅「こ、ここに…」

神田、缶を開けて見る。

神田「ほく結構貯まってるじゃねえか。これもらっていくぞ」

三宅「ええ！」

直人「みんなに返してあげるんですね」

神田「バカ、手間賃だ手間賃。なんでそんな事すんだよ。俺が貰うんだよ」

直人「…」

三宅「そ、それは返してくれ！」

神田「お前の金じゃねえだろ」

三宅「で、でも…それがねえと、お腹の子供が…」

神田「は？どういうことだよ？」

三宅、俯く。神田、三宅を叩き。

神田「早く言えよ！」

三宅「…か、彼女が…妊娠して…」

神田「それで？」

三宅「でも、産みたくねえって…それは俺に金がねえから…」

神田「それでこいつら使ってカツアゲか？」

三宅、頷く。

三宅「か、金さえあれば、彼女も安心できるだろうし…結婚も許して貰えると思うし」

神田「働いてんだろ？しかも実家暮らしで。

貯金があるだろうか？」

三宅「貯金は全部…ビックスクーターの改造費に…」

神田、三宅を叩く。

神田「お前みたいなの奴チャリ乗れよ。いやチャリも贅沢だな。走れ、バカ」

三宅「…」

神田「しかもカツアゲで作った金？産まれてくるガキに胸張れんのか？ああ？」

三宅「（泣き出して）金は金だから…赤ちゃん産んで欲しいっす！結婚したいっす！だから金っす！」

神田「はあ？金？違うだろ」

三宅、泣いている。

神田「女を絶対に幸せにするという覚悟と、誠意を見せるんだろが！」

三宅「（泣きながら）覚悟と誠意は見せたっす！でも…産みたくないとか言うし…」

神田「（呆れて）それお前嫌われてんだよ」

三宅「（大声で）嫌われてなんかないっす！俺達の愛の結晶っす！」

神田「諦める諦める」

三宅、神田を見ながら。

三宅「俺、絶対に諦めないっす。マジっす」

神田、三宅を叩く。

神田「生意気なんだよ。そんなにいい女なのか」

三宅「（ニヤけて）久美ちゃんっていいます。

若月久美」

三宅、久美と写っている写真を見せる、

神田「え？」

直人「…ええ！？」

神田、直人と驚いて顔を見合わせる。

○若月の家・玄関・中（夜）

神田、直人、三宅、入ってくる。

若月、久美、言い合いをしている。

久美の声「だから高校辞めて家を出るって言ってるでしょ！」

若月の声「そんな勝手なことは許さん！」

久美の声「何が勝手よ！あんたに関係ないし」

神田、うんざりした表情。

神田「あいつら、なんなんだよ…」

○同・リビング・中（夜）

神田、直人、三宅、入ってくる。

若月、久美、手足が縛られているため、床でもぞもぞしながら言い合いをしている。

二人の間でもぞもぞしながら、おろおろしている麻衣子。

久美「私はもうこんな家出ていくから！！」

若月「ダメだったらダメだ！」

神田、ため息をついて。

神田「おい…お前ら何やってんだよ」

麻衣子、神田を見上げて。

麻衣子「ああ、強盗さん。お帰りなさい…二人ともずっとこの調子で…」

若月、神田を見上げて。

若月「強盗さん、聞いてくださいよ。こいつは自分勝手なことばかり！高校辞めて家を出るって言うんです！」

久美、神田を見上げて。

久美「強盗さん！私は、こんな家、早く出て

行きたいだけなんです！」

三宅「（直人に）ご、強盗さん？」

直人「あの人、うちに入ってきた強盗です」

三宅「…はあ！？強盗！？」

久美、三宅に気がつき。

久美「和樹くん！？」

三宅、小さく手を挙げる。

若月「ああ？誰だ？」

神田「腹の子の父親だよ」

若月「なっ！！なんだとぅ！！」

若月、床を這って三宅に向かっていく。

神田、若月を踏んづけて止める。

神田「落ち着けよ」

若月「よくもうちの娘を！娘をく！！」

三宅、怖がっている。

神田「いいから落ち着けて」

若月「止めないでください！こいつ殺してや

るく！」

久美「止めてよ！」

麻衣子「あなたく！」

若月「強盗さん、拳銃を貸してください！私に拳銃をく！！」

神田「（大声で）いい加減にしろ！！」

全員、黙る。

神田「こんな事やってる場合か！子供が誘拐

されてんだぞ！」

静まり返る。

× × ×

若月、麻衣子、直人がソファーに座っている。

テーブルを挟み向かいに、久美、三宅、座っている。全員、拘束されている。

神田、少し離れた所に立っている。

三宅、土下座するが、手足が縛られているため、変な形の土下座。

三宅「パパさん！俺、愛してるっす！マジっす！」

若月「…だからなんだ。愛しているから、高校生を腹ましていいっていうのか？愛しているから、娘の…久美の将来を奪っていい

っていうのか！！」

三宅「そ、それは……」

若月、三宅の胸倉を掴み起こす。

麻衣子「ちよっと！あなた！」

若月「（泣いて）久美にはな……たくさんの夢

があつたんだ……小学生の頃はケーキ屋さん

……中学生ではキャビンアテンダント……たく

さんの夢が、未来があつたんだ！それを

……！」

麻衣子「あ、あなた落ち着いて……」

久美「もう止めて！！」

全員、久美を見る。

久美「私……」

久美、若月を見て。

久美「私……この家出る……」

若月「だからそれは！」

久美「（三宅を見て）赤ちゃんも……産まない」

三宅「久美頼む！頼むから産んでくれ！」

久美「……」

三宅「……俺、久美の事、マジで愛してる！俺

達の愛の結晶を産んでくれ！」

久美「和樹くん……」

三宅、熱い眼差しで久美を見つめる。

久美「私だって……私だって産みたいわよ！」

三宅「久美……」

久美「でも……でも、家族を持つのが怖いの

よ！この家みたいなバラバラな家族になっ

たらどうしようって怖いよ！」

久美、泣いている。

神田、うんざりした感じで。

神田「おい。もう何でもいいからお前、ガキ

産めよ」

久美「え……」

神田「そうしないとこっちが色々困るんだよ」

久美「で、でも……」

神田「お前はお前なりの家族を作ったらいい

だろうが。なにビビッてんだよ」

久美「……それは」

神田「いいか。家族なんてもんは、そう簡単

にバラバラになんてならねえんだよ」

久美「…え？」

神田「バラバラに見えて根っこの部分でちゃーんと繋がってるんだ。愛ってやつでな」

久美「あ、愛？」

神田「愛っていう漢字知ってるか？『受ける』という字の真ん中に『心』がある」

久美、頷く。

神田「これは、自分や相手の『心』を『受け止める』。それが『愛』なんだよ」

久美「自分や相手の心を受け止める…？」

神田「親の心（三宅を指して）こいつの心、そして何より（自分の胸を指して）自分の心をな」

久美、自分の胸を触り、ギュッと掴む。

神田「お前が産みたいって心をしつかりと受け止めろ」

久美「強盗さん…（泣く）」

若月「ちよ、ちよっと待ってください！久美はまだ高校生なんですよ…それなのに…」

神田「あのな、こいつは、ケーキ屋よりもキ

ヤビンアテンダントよりも、腹の中にいる
ガキと一緒にいられる未来を夢見てんだ」

若月「…でも」

神田「その夢を、親のお前が、潰そうとして
るんだぞ。それが親のすることか？ああ？」

若月「し、しかし…」

神田、若月の手をしっかりと握り。

神田「いいか、お前ら家族はこの困難を乗り

越えれば、必ずまた一つになれる」

麻衣子「強盗さん…」

神田「そしたら、また一步一步進んで行った
らいいんだ。お腹の子と一緒にな」

若月「（涙ぐんで）は、はい…！」

麻衣子「強盗さん、ありがとうございます！」

久美・三宅「ありがとうございます！」

神田「（得意気に）おう」

直人「…（小首をかしげ腑に落ちない表情）」

神田、直人を叩く。

固定電話が鳴る。若月、神田を見る。

神田、頷いて、スピーカーのボタンを

押す。

若月「…も、もしもし」

ボイスチェンジャーで変えられた声の

橋口。

橋口の声「どうも、最終確認です」

○廃工場・中（夜）

橋口、目出し帽を被っており、携帯で話している。

橋口「深夜にすみませんね。でも大事な連

絡ですから」

若月の声「満は？満は無事なのか？」

橋口「あくはいはい。今送りますね」

橋口、富田に合図する。

富田、満にパソコンを向ける。

満、目隠しをされ、縛られて床に寝ている。

× × ×

若月の携帯電話に着信音が鳴り、神田、開いて見せる。

満が横たわっている映像。

若月「み、満く！！」

麻衣子「満：満：（泣き出す）」

久美「ちよつと：満：どうなってんのよ」

橋口の声「落ち着いてくださいよ。寝ている
だけですから」

若月「ね、寝てる：？」

橋口の声「そりやそうでしょ。もう夜中の1
時、お化けは夜の墓場で運動会の時間だ」

若月「ほ、本当だろうか：？」

× × ×

橋口、イスに座っている。

橋口「疑り深いなあ。（富田に）おい」

富田、満を揺さぶる。

満「：う、うくん」

橋口「ほら、寝てるだけでしょ」

若月の声「よかった：」

直人の声「満！必ず助けるからな！」

橋口「おや？その声は直人君かな？」

直人の声「：は、はい」

橋口「明日の事はもう聞いたのかな？」

直人の声「…聞きました」

橋口「大変なお仕事だけどよろしくね。なん

せ弟君の命がかかってるんだから」

直人の声「で…でも」

橋口「（笑いながら）お兄ちゃんだから、

それくらい出来るでしょう？」

若月の声「わ、私が行くのではダメなのか？」

橋口「ダメですよ。私は直人君にお願いして
るんですから」

若月の声「そんな…」

橋口「明日の朝7時、海浜公園の駐車場で。

あ、それと若月さんの携帯電話も忘れずに

お持ちください。いいですか？」

× × ×

若月「し、7時に海浜公園の駐車場だな」

橋口の声「お金を貰い、私達が安全な所まで

行ったら、満君の場所をご連絡しますので。

では明日」

若月「あ！ちよっと！」

× × ×

橋口、電話を切る。

目出し帽を脱ぎながら。

橋口「（富田、中谷に）おい、パスポートは準備してるのか？」

富田「ああ」

中谷「バッチリだ」

橋口「明日の今頃は海外で女でも買って楽しもうぜ」

三人で笑い合う。

○若月の家・リビング・中（夜）

「ツイッター」と電話音がする。

神田、電話を切る。

麻衣子、シクシクと泣いている。

直人、久美、俯いている。

三宅、ポカンとしている。

直人、顔を上げて。

直人「…僕…行くよ」

若月「直人…」

直人「僕、行くから。強盗さん、お願い、満を助けて！」

神田「俺も困るんだよ、満が戻ってこないと。だからお前も根性見せろよ」

若月「あの：本当に満は大丈夫でしょうか？」

神田、うつむく。

麻衣子「そ、そんな：！」

麻衣子、泣き出す。

神田「：ただ、あいつらも金が入るまでは手を出さないはずだ」

若月「それまでに居場所を見つけられれば：」

若月、携帯に届けられた映像を出して皆で見る。

若月「なにか：何か手がかりは：」

久美「見覚えがある物とかないの？」

麻衣子「あなた、どうなんですか？」

若月「これだけじゃ何も：！落ち着け：落ち

着け：」

三宅「あの：ちよつといいですか？」

三宅、もぞもぞしている。

神田「ああ？なんだ？」

若月「…トイレだったら、廊下の一番奥だ」

三宅「いや、違うんですよ。あの…」

神田「だからなんだよ」

三宅「僕：その映像の場所、分かりますけど」

全員「ええ！！」

神田「な、何でだよ！？何で分かるんだ？」

三宅「その窓の所に、赤い屋根が映りこんで

ますよね？」

神田、若月、映像を見る。

若月「確かに…暗くてハッキリ分からないが、

なんか赤いのが見える」

三宅「それ、僕の家です」

神田「お前の家！？」

久美「（大声で）ああ！そうだ…確かに和樹

くんの家の屋根、赤かった」

麻衣子「ほ、本当なの久美？」

久美「うん、だって初めて見たときに『何こ

の赤色。普通の赤じゃないじゃん。センス

悪いな』って思ったもん！」

三宅「え：センス悪い：」

直人「ということとは、そのセンスの悪い家の近くに満がいるって事だよね！？」

三宅「いや：あの：」

神田「おい！そのセンス悪い家の近くには、

工場とかあるのか？」

三宅「あ：はあ：はい」

神田「よし！その中のどつかにいるはずだ」

久美、三宅の腕を掴み。

久美「和樹くんすごい！！」

三宅「あ、うん：」

久美「え？なにになに？どうしたの？」

三宅「いや：別に：」

神田「よし！これで何とかなるかもしれない。

（全員に）おい、いいか」

神田、全員に話し始める。

○海浜公園・駐車場

広い駐車場。人はおらず、2台くらい車が止められている。

直人、アタッシュケースを重そうに持ち、携帯を握り締め立っている。

駐車場に建っている屋外時計は「7時」になっており、不安そうな直人。

携帯に着信がある。

直人、恐る恐る出て。

直人「も：もしもし？」

橋口の声「やあ、直人君。おはよう」

直人「：」

橋口の声「おや？元気がないね。昨日はよく眠れなかったのかな？」

直人「：満は？満を早く返してください！」

橋口の声「そんなに焦るなって。じゃあまず、そのまま電話を切らずに、駐車場の入り口まで来てくれるかな？」

直人「は、はい：」

直人、歩き出す。

橋口の声「そうそう。ゆっくりでいいからね」

直人、駐車場入り口に着く。

橋口の声「よし、じゃあ車道にその鞆を置い

てもらっていいかな」

直人「え…でも」

橋口の声「いいから」

直人「はい…」

直人、車道にアタッシュケースを置く。

直人「お、置きました」

橋口の声「よし、じゃあ回れ右して元の場所

までダッシュユ！」

直人「え？え？」

橋口の声「ダッシュユダッシュユ！Bダッシュユ！」

直人「あ、は、はい！」

直人、後ろを向いて走り出す。

富田が運転する車がアタッシュケース
に近づく。

橋口、助手席から携帯で電話しながら

アタッシュケースを取る。

車、走り去る。

直人、走っている。

橋口の声「はくい、ご苦労さん」

直人、立ち止まる。

直人「（息が荒い）あ、あの…満は…？」

橋口の声「あ、僕らが安全を確認したら、
連絡するから。じゃあね」

電話が切れる。

直人「ああ！ちよっと！」

直人、立ち尽くす。

○道路

交通量は多くはない。

神田、道路脇に車を停車している。

直人が置いたアタッシュケースを拾っ

て走り去る橋口達を見る。

神田、車を発車させ橋口達を追う。

○廃工場・外観

通りを挟んだ側に三宅の家がある。

若月、三宅、廃工場の前に立つ。

○同・中

満、ぐったりしている。

中谷、イスで寝ており、イビキをかいており、そこに三宅、入って来る。

中谷、その音で起きる。

中谷「（寝ぼけた声で）おお、早かったな：

鮭ハラスのおにぎりあった？」

中谷、三宅を見て立ち上がり。

中谷「だ、誰だ！？」

三宅「あ：えくと、あの：

中谷「止まれ！誰だお前！？」

三宅「あ：あの、あそこに赤い屋根が見える
じゃないですか？」

三宅、窓を指差す。

中谷「：それがどうした？」

三宅「あれってそんなに変ですかね？」

中谷「はあ？」

三宅「みんながセンス悪いって：

中谷「ああ？お前なに言ってるんだ」

三宅「俺はそんなに悪くないと思うんですが」

若月、中谷のすぐ背後に立っており、

鉄パイプを中谷めがけ振り下ろす。

中谷、その場に崩れ落ち、気絶する。

若月、肩で息をしている。

若月「わ、わしも…そんなに悪くないと思う

ぞ…」

○道路

神田、道路脇に車を停車している。

橋口、富田、コンビニで買い物。

神田の携帯に着信があり、電話に出る。

神田「…分かった」

神田、電話を切る。

橋口、富田、コンビニから出てきて、

車に乗り込み発車させる。

神田、その後ろをついていく。

○廃工場・外

橋口、富田の車が止まり、二人とも降

車し廃工場の中に入る。

○同・中

橋口、アタッシュケースを持ち、富田、

コンビニの袋を持っている。

富田「おい、言ってたやつなかったぞ。鮭とイクラので我慢してくれよ」

橋口、満がないことに気がつき。

橋口「おい：ガキがいねえぞ」

富田、奥に向かって叫ぶ。

富田「中谷！どこにいるんだ？おい！」

神田、入ってくる。

橋口、富田、振り返り。

富田「中谷、どこに行つて：」

橋口、富田、神田を見て驚く。

神田、銃を構えている。

神田「悪かったな、お前の友達じゃなくて」

橋口「だ、誰だ！？」

神田「おっと！大声を出すなよ。この状況でお前達が出来ることはたった一つだ。ただ

大人しくする。どうだ？簡単な事だろう？」

富田「：な、なんの用なんだ？」

神田「お前達は今、大金を持っている。そこに銃を持った男がやってきた」

橋口「…か、金か？」

神田「金か。いいね。金も貰おうかな」

橋口、アタッシュケースを抱えて。

橋口「ふざけんなよ！この金は俺らのだ！」

神田「あれ？もしかして、この銃がただの脅しで本物じゃないと思ってる？」

神田、壁に向けて拳銃を二発撃つ。

サイレンサーが付いておらず、パー

ン！パーン！と大きな音が鳴り響く。

壁に二つの穴が開く。

神田、橋口達を見てニコツと笑う。

橋口、富田、怖がり、手を挙げる。

神田、落ちたアタッシュケースを拾う。

神田「はい、どうも」

神田、中身を確認する。

神田「あ、そうだ。お前のお仲間は、あつちで縛られてるぞ」

橋口、恐る恐る話しかける。

橋口「あ、あんた…若月に頼まれたのか？」

神田「は？何言ってるんだ」

橋口「違うのか…？じゃ、じゃあ誰だよ？」

神田「俺か？俺は強盗だよ」

橋口「ご…強盗？」

神田「そう。ただの強盗」

神田、橋口に殴りかかる。

○若月の家・リビング・中

神田、入ってくる。手にはアタシユケ

ースを持っている。

若月、直人、久美、三宅、出迎える。

麻衣子、ソファで寝ている満の側にいる。

若月「…お帰りなさい」

神田「満は？」

麻衣子「はい。怪我一つしてません。少し疲

れて寝てるだけです」

直人「もう大丈夫なの？あいつらは？」

神田、ニヤツと笑う。

○廃工場・中

橋口、富田、中谷、気絶しており縛ら

れている。

紙が貼られて「私達は誘拐犯です」と書かれている。

パソコンに満が縛られている映像と、橋口達が若月に電話で話している映像が映っている。
遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。

○若月の家・リビング・中

全員、ホッとして。

神田「もうすぐここにも警察が事情を聞きにくるだろうが：分かってるな？」

直人「も、もちろん内緒にします」

神田、満のランドセルを拾う。

小さくて赤い入れ物を引きちぎり、中からUSBを取り出す。

神田「これか」

神田、若月を見る。

頷く若月。

麻衣子「…あなた…あれは」

若月「いいんだ」

麻衣子「でも…あれが他に渡ったら、会社は

どうなるの？」

若月「正直、厳しいだろ…でも今はお前達が

…母さん、直人、満、久美、そして…お腹

の子…家族が全員無事だった事を喜ぼう」

麻衣子「あなた…」

若月「今まで、本当にすまなかった…許してくれ。この通りだ」

若月、頭を深く下げる。

麻衣子、若月に寄り添い泣く。

直人「父さん…」

久美「…お父さん…私も…ごめん」

久美、若月に抱きつく。

若月「（泣きながら）ごめんな…ごめんな」

神田、その様子をしばらく眺めている。

神田、アタッシユケースを久美の足元に投げる。

久美「え？」

神田「ちっと早いが、出産祝いだ」

久美「い、いいの：？」

若月「ご、強盗さん！」

神田「まあ：金は金だからな」

三宅、神田を見る。

神田、USBを直人に投げる。

直人「：これ」

神田「お前が好きに使え」

直人、若月の顔を見る。

直人「で、でも、強盗さんが何もなくなるん

じゃ：」

神田「そうだな」

神田、キョロキョロして。

神田「俺はこれでも貰って行こうかな」

神田、棚にある木彫りの置物を取る。

若月「え：そ、そんなのでいいんですか？」

神田「ああ。俺はこれで充分だ」

若月「強盗さん：！」

若月、号泣している。

若月「本当にありがとうございました！」

若月、神田に深く頭を下げる。

直人、久美、三宅、麻衣子、続けて頭を下げる。

若月「…本当に…何から何まで…」

神田「泣くな、泣くな。おっさんの涙なんて気持ち悪いだけだろ」

若月「す、すみません」

直人、久美、三宅、麻衣子、泣きながら笑っている。

神田「じゃあな！」

神田、急いで出て行く。

○同・外

2、3人の通行人。

神田、歩いてくる。

木彫りの置物を眺めキスをする。

神田「これが3億」

神田、ニヤッと笑う。

直人、玄関から飛び出してくる。

直人、神田の離れていく背中に叫ぶ。

直人「（大声で）強盗さくらん！」

神田、驚いて振り返り。

神田「バカ！声がかい！」

直人「僕！決めた！」

神田「ああ？」

直人「将来、強盗さんみたいな強盗になる！」

神田、ニコツと笑い。

神田「バカ！」

笑う神田と直人、通行人達が不思議そ

うに見ている。

遠くでパトカーのサイレンの音が鳴っ

ている。

（終わり）